

令和5年度 普及のあゆみ



令和6年3月

熊毛支庁屋久島事務所農林普及課

鹿児島県熊毛郡屋久島町安房650番地

TEL 0997-46-2236

FAX 0997-46-3384

は じ め に

令和5年度は、5月8日に新型コロナウイルス感染症5類移行したことにより、行動制限が緩やかになったことから、コロナ禍以前の地域活動がなされるようになりました。しかし、令和4年2月からのロシアによるウクライナ侵攻や中東の紛争、ドル高円安など国内の景気の不透明感があり、燃油、肥料や飼料等の資材が高騰し続け、農業経営を圧迫しています。また、令和6年元日の能登半島地震では、甚大な被害があり、未だに厳しい状況が続いています。農業では昨年度に引き続き、鳥インフルエンザ感染による鶏の殺処分など養鶏生産者には厳しい状況が続いております。屋久島においても、昨年に引き続きミカンコミバエが7月18日から9月11日にかけ2地点で誘殺され心配されましたが、関係機関の初動対応によりその後の発生を抑えることができました。

屋久島の農業・農村を取り巻く情勢は、高齢化に伴う農業従事者の減少や耕作放棄地の増加、また、輸送費に加え、肥料、燃油等資材の高騰によるコスト上昇など多くの課題に直面しています。

一方で、本年度は屋久島で新たに農業を始める新規就農者が5名も誕生しました。また、法人化を設立した農業者など多様な担い手も出てきています。これからの屋久島の農業を支える人材として、今後の活動や営農が非常に楽しみな状況です。

このような中、屋久島事務所農林普及課では本県の食、農業及び農村に関する施策の方向性を示した「かごしまの食と農の県民条例に基づく基本方針」や令和4年3月に策定された「かごしま未来創造ビジョン」の実現に向け、普及指導活動における課題と対象の重点化、普及指導活動の高度化・効率化を一層推進し、「農業を支える人材の確保・育成に向けた取組に対する支援」、「本県の特性を生かした安全・安心な農畜産物の生産体制づくりに向けた取組」、「スマート農業などの新技術を活用による生産性向上に向けた取組に対する支援」、「農村振興に向けた取組に対する支援」の4つの基本的課題を強化してきました。

この度、活動の経過や成果並びに実証・展示ほの成績を「普及のあゆみ」としてまとめました。今後地域農業の振興や、地域農業を担う個別経営体や組織育成に活用いただければ幸いです。

終わりに、実証・展示ほの設置等に御協力いただきました農業者の方々、普及指導活動を展開するにあたり、御支援・御協力いただきました指導農業士や女性農業経営士をはじめ普及指導協力委員の方々、屋久島町、屋久島町農業委員会、種子屋久農業協同組合等関係機関・団体の皆様に、心より感謝申し上げます。

令和6年3月

屋久島事務所農林普及課
課長 樋口 真一

目 次

I 普及活動事例

- 1 屋久島農業を支える担い手農家の育成（経営体の育成）・・・・・・・・・・ 1
- 2 屋久島農業を支える担い手農家の育成（地域営農）・・・・・・・・・・ 3
- 3 サツマイモ基腐病低減対策の実証・普及・・・・・・・・・・ 5
- 4 屋久島農業を創造する次世代リーダーの確保・育成・・・・・・・・・・ 7
- 5 （1）屋久島の特性を活かした産地育成（畑作）・・・・・・・・・・ 9
（2）屋久島の特性を活かした産地育成（果樹）・・・・・・・・・・ 11
（3）屋久島の特性を活かした産地育成（茶）・・・・・・・・・・ 13
（4）屋久島の特性を活かした産地育成（畜産）・・・・・・・・・・ 15
- 6 屋久島の農林水産物を活かした6次化ビジネスモデルの育成・・・・・・・・ 17

II 実証・展示ほ等成績

- 1 新規登録農薬「フリントフロアブル25」の効果検証・・・・・・・・・・ 19
- 2 ミカンハダニの薬剤抵抗性の検討・・・・・・・・・・ 21
- 3 屋久島における粗飼料自給率の向上・・・・・・・・・・ 23
- 4 畑かん水の多目的利用の導入検討・・・・・・・・・・ 25

III 参考資料

- 1 令和5年の主要作物生育経過・・・・・・・・・・ 27
- 2 令和5年の気象データ・・・・・・・・・・ 29
- 3 ミニ情報でつづるこの1年・・・・・・・・・・ 31
- 4 令和5年度各種表彰について・・・・・・・・・・ 38
- 5 令和5年度活動体制・・・・・・・・・・ 39

I 普及活動事例

課題名 屋久島農業を支える担い手農家の育成（経営体の育成）

【成果の要約】

経営改善計画書の作成支援や認定新規就農者から認定農業者への誘導により、認定農業者11戸を確保できた。モデル経営体への継続支援の結果、町基本構想に掲げる農業所得を10戸のうち7戸が達成した。かごしま農業経営相談所と連携した法人化支援により、法人1戸が設立された。また家族経営協定が1戸締結された。

1 対象

認定農業者60戸（R5年度末）、モデル経営体10戸、複合経営志向農家3戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島の地域農業を維持・発展していくため、認定農業者を中心とした担い手の確保と育成対策が不可欠である。その中で地域をけん引するモデル経営体の経営改善指導を行い、稼ぐ力のある魅力的な農業経営を確立していく必要がある。また、年間を通じた所得確保や経営の安定のため複合経営の実践支援と検討を行う必要がある。

3 活動内容

(1) 認定農業者の確保・育成

町担い手育成総合支援協議会と連携し、認定農業者の確保のための経営改善計画の作成支援と、経営改善計画の実践支援を行ったほか、パソコン簿記による経営管理指導、家族経営協定の推進等を行った。

(2) モデル経営体の目標達成支援

モデル経営体10戸に対して、経営計画の達成に向けた経営及び生産技術の改善支援を行った。法人化を志向する1戸の担い手に対し、かごしま農業経営・就農支援センターの派遣税理士と連携した法人化支援を行った。



パソコン簿記基礎研修

(3) 複合経営モデル育成

ア 茶・ばれいしょ複合

生産者2戸に対し、生産技術指導を実施するほか、茶とばれいしょの品目ごとの経営内容について検証した。

イ ドラセナ・パッションフルーツ複合

新規就農者でドラセナとパッションフルーツの施設栽培に取り組む農家に対して基本的な技術指導を行った。

ウ 畜産・ばれいしょ複合

新規就農者で肉用牛とばれいしょの複合経営に取り組む農家に対し、基本技術の指導及び生産効率のための生産機械の導入検討を行った。



複合経営モデルの現地指導

4 活動の成果

(1) 認定農業者の確保・育成

認定農業者については、経営改善の提案活動により新規認定者が1戸確保された。また11戸が再認定され、令和5年度末で60戸となった。なお高齢化等により辞退は2戸であった。各生産者の経営改善計画の作成支援により、今後の経営課題の明確化につながった。経営管理能力の向上のため、パソコンによる複式簿記に取り組む生産者が農家が新規で2戸増加した。家族経営協定締結に向けた支援の結果、1戸が締結に至った。



家族経営協定調印式

(2) モデル経営体の目標達成支援

モデル経営体10戸に対し、技術支援や経営分析など5年間の継続支援の結果、生産技術の向上や規模拡大等の成果が得られた。近年の経営費の高騰や価格低迷等の影響はあったものの、町基本構想となる所得について10戸のうち7戸が達成した。また、かごしま農業経営相談所を活用した法人設立支援の結果、1戸が法人設立された。

(3) 複合経営モデル育成

ア 茶+ばれいしょ

茶とばれいしょの複合経営に取り組み、それぞれの品目ごとの経営評価を行った結果、現状においてばれいしょの収益性の高さが明確となり、今後のばれいしょを中心とした経営方針への見直しに至った。

イ ドラセナ+パッションフルーツ

夏場の収益品目であるパッションフルーツは、早期防除や温度管理により昨年を上回る収量となった。ドラセナについては、安定収量が確保できる適期管理について今後も継続して調査・検討していく。



複合モデルに導入したばれいしょ植付機

ウ 畜産+ばれいしょ

たね切り・植え付け機械の導入により、省力作業が可能となったことにより、ばれいしょの作付面積が1haから2haへと規模拡大が図られた。当複合モデルについては、経営評価として収益性が確保できることから、今後も継続する予定である。

5 今後の課題

(1) 認定農業者の確保・育成

認定農業者の確保については、認定新規就農者からの移行支援を行うとともに、関係機関で連携しアクションサポートチームによる経営改善計画の実践支援を強化していく。

(2) モデル経営体の目標達成支援

過去の経営評価を踏まえ、モデル経営の新たな選定と、稼ぐ力向上のための経営改善目標の達成に向けた経営・技術を継続支援する。

(3) 複合経営モデル育成

成果のあった複合経営については継続支援を行う。夏場の収益品目としてパッションフルーツが増加していることから、パッションとの複合経営に対し技術支援を行う。

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

吉田，〇新川，片山，佐藤，下村

課題名 屋久島農業を支える担い手農家の育成（地域営農）

【成果の要約】

機械導入区分け地図を活用し一部で農地の集積が始まった。労働力調査では雇用時の課題としてトイレ施設や降雨時の対応が重要であることを生産者が認識した。更に労働力確保の手法としてマッチングアプリの活用も検討した。一部の農家ではSS等を導入できる機械化体系を考慮した園地整備を始めるなど、生産者が省力化を意識し始めた。地域計画は過去のビジョン会議での取りまとめも活用し地域の課題を反映した計画が策定された。

1 対象

原園芸組合役員等12戸

2 課題を取り上げた理由

原集落では、将来の地域営農のしくみづくりに向けての話し合い活動が行われており、10年後の営農ビジョンを策定し、実現のためビジョン会議を実施している。

果樹を中心とした新たな営農ビジョンをもとにした継続した取組を支援する必要がある。

3 活動内容

(1) 果樹を主体とした地域営農のしくみづくり

ア 行動計画実践支援

㍲ 営農のしくみづくり

ビジョン会議や各種研修会を通じて地域リーダーと地域の課題について検討した。

また原地区機械導入区分け地図を使い今後の営農方法や、中心となって集積すべき地区、人について検討し情報を共有化した。

担い手確保の意味から今後は集落外の人も原地区に土地を所有する人は準会員となってもらふ等の対策も検討した。

(イ) 果樹を支える人材

昨年の労働力調査で農繁期の雇用が必要と答えた会員に対し、労働力調査を実施。実際の雇用にあたり問題となる課題を抽出し、対応策（案）の検討をおこなった。

(ロ) 農業のあり方

ビジョン会議において安全で負担の少ない農業の推進と、隔年結果対策について検討した。

イ 地域計画策定に向けた話し合い活動支援

ビジョン会議の分科会で土地の流動化や、労働力確保の手法、各種技術研修会において収益の上がる果樹園管理等の話し合い活動を支援した。

4 活動の成果

(1) 果樹を主体とした地域営農のしくみづくり

ア 行動計画実践支援

(ｱ) 営農のしくみづくり

機械導入区分け地図の周知で将来守るべき有望な土地が明確化され、一部で農地集積が始まった。

(ｲ) 果樹を支える人材

労働力調査の結果、農繁期の雇用を希望する組合員の雇用時の課題としてトイレ施設の対応と降雨時の対応が特に重要であることを生産者が認識できた。また、事務局無しでも雇用を確保する手法としてマッチングアプリ「1日農業バイト」の活用も視野に今後取り組むこととなった。

(ｳ) 農業のあり方

隔年結果対策で指導した着果数18個／㎡に取り組む農家が出始めた。更に、一部の農家がSS等を導入できる機械化体系を考慮した園地整備を始めた。

イ 地域計画策定に向けた話し合い活動支援

地域計画策定に向けた集落検討会において、原地区の地域計画を検討、過去数年のビジョン会議等での取りまとめ事項もあり、地域農業の課題として担い手不足解消のため新規就農者の促進、農業の将来のあり方は果樹園の面積維持と樹園地の更新等、地域計画は順調に協議され作成された。



既存園の低樹高化研修



目標地図作成で農地流動化を図る

5 今後の課題

- (1) 地域が主体となった話し合い活動の強化
- (2) 「地域計画」の実践支援

6 担当した普及職員（○はチーフ）

○吉田，佐藤，下村，小野島（農村整備係）

課題名 サツマイモ基腐病低減対策の実証・普及

【成果の要約】

屋久島プロジェクトチーム（以下PT）によるサツマイモ基腐病の課題解決活動として、定期巡回によるサツマイモ基腐病発病状況調査及び、生産者と酒造会社向けに講習会等を開催した。

サツマイモ基腐病対策の技術確立として、①新規登録農薬効果実証と②サツマイモ基腐病抵抗性品種の栽培実証について現地実証試験を行った。

1 対象

さつまいも生産農家13戸（重点対象農家6戸）

2 課題を取り上げた理由

屋久島内には、三岳酒造と本坊酒造の2つの酒造会社があり、焼酎用さつまいもは畑作農家にとって重要な品目であったが、サツマイモ基腐病により生産性が低下している。

PTの活動や現地実証等を通じて、病害低減による生産安定を図る必要がある。

3 活動内容

（1）PTによる課題解決に向けた活動

島内全ての育苗ハウス及び本ぽにおいて、屋久島町役場担当者と一緒に巡回調査を実施した。（月1～2回程度）また、農業開発総合センターの専門普及指導員との同行を行い、生育障害ほ場の原因究明を行った。

サツマイモ生産者と酒造会社向けの講習会を開催し、島内の発病状況や優良事例などの情報共有を行った。



巡回調査風景

専門普及指導員の同行

情報交換会

（2）実証ほの設置

サツマイモ基腐病の技術確立のために、今期は①新規登録農薬「フリントフロアブル25」の効果実証と②抵抗性品種「みちしずく」の栽培実証を行った。

4 活動の成果

（1）PTによる課題解決に向けた活動

屋久島北部地区においては、5月にサツマイモ基腐病の発生が確認されてから、発病株の抜き取りや農薬散布等の対応を行ったが、8月の台風の影響によってサツマイモ基腐病や軟腐病等の発生により単収に影響した。

屋久島南部地区においては、8月中旬から10月にかけての乾燥の影響で、チョウ目害虫による葉の食害やハダニによる葉の黄化が多く見られた。また、サツマイモ基腐病の発生に加えて、一部のほ場にてフザリウム菌や紫紋羽菌が原因と考えられる“腐敗症状”の発生によって単収が大きく下がった生産者も見受けられた。



チョウ目害虫の発生による葉の食害（9月）



ハダニによる
葉の黄化（10月）



腐敗症状
（11月）

（2）実証ほの設置

①新規登録農薬「フリントフロアブル25」の効果実証

対照区を「フロンサイドSC」として、定植前の土壌消毒剤として使用した場合のサツマイモ基腐病の抑制効果を実証した。結果として、収穫時の腐敗発生株率は「フリントフロアブル25」区で11%、「フロンサイドSC」区で3%となり、「フロンサイドSC」区の方が抑制効果が高かった。

また、フロンサイドSCは令和5年6月に「定植後の茎葉散布」としての登録拡大があったので、茎葉散布としての効果も実証する必要がある。

②抵抗性品種「みちしずく」の栽培実証

対照区の品種を「ジョイホホワイト」として、サツマイモ基腐病発生率と単収を比較した。結果として、「みちしずく」の収穫時腐敗株発生率は15%、単収は6.1t/10aとなり、「ジョイホホワイト」の収穫時腐敗株発生率は5%、単収は3.1t/10aとなった。

「みちしずく」については、島内生産者の平均単収が3t/10aを超えており、今後の普及が見込まれる。

5 今後の課題

- （1）サツマイモ基腐病抵抗性品種「みちしずく」の普及拡大
- （2）「フロンサイドSC」の効果実証（茎葉散布としての効果）

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇吉田、佐藤、新川、片山

課題名 屋久島農業を創造する次世代リーダーの確保・育成

【成果の要約】

青年農業者は、プロジェクト活動や青年農業者会議を通して、自らの経営課題の把握や技術実証に取り組み、1名が青年農業士に認定された。

新規就農者は、3戸の経営計画達成に向け個別課題の改善に取り組み、今年度は新たに5名が認定新規就農者となり、1名が認定農業者となった。

女性農業者は新たな取組としてWeb会議による若手女性交流会を実施、他地区の女性農業経営士の活動に刺激を受けネットワークを強化した。

1 対象

屋久島農業青年クラブ11名、新規就農者16名、屋久島つわぶき会13名、屋久島しゃくなげ会19名、生活研究グループ16名

2 課題を取り上げた理由

担い手農家の高齢化が進む中、数少ない青年農業者には地域の農業を牽引することが望まれ、プロジェクト活動や組織活動を通して生産・経営管理技術や資質向上が必須である。また、高齢化等により農家の減少が予測される中、次世代を担う新規就農者の確保と育成は必須であり、就農相談の段階から営農定着・発展まで、関係機関と連携した円滑な支援が必要である。

3 活動内容

(1) 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通じた生産・経営管理技術向上支援

青年農業者の経営・技術改善に向けたプロジェクト活動の実践支援を行った。

イ 新規就農者の課題改善支援

新規就農者それぞれの経営・技術の課題把握のため、関係機関と巡回指導を行った。新規就農者励ましの会や基礎研修会、現地就農トレーナーと連携した部門別研修会を開催し、新規就農者の定着を支援した。



プロジェクト発表

(2) 女性農業者の確保・育成

ア 次世代リーダーの育成

女性組織の役員会等で女性農業経営士候補を決定し、関係機関と伴に、訪問し女性農業経営士の内容を説明した。何度か訪問し研修受講を促したが県の養成講座を受講させることはできなかった。



基礎研修

イ 若手女性農業者間のネットワークづくりの支援

若手女性農業者交流会（Web）を開催，鹿児島市の女性農業経営士に活動事例を発表してもらい，その後屋久島の若手女性（5名）と意見交換を実施した。

4 活動の成果

(1) 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通じた生産・経営管理技術向上支援

6名がプロジェクト活動に取り組み，うち2名が地区青年農業者会議で発表した。各プロジェクトについて，指導農業士や女性農業経営士，新規就農者，青年農業者同士で相互検討や意見交換し，資質向上が図られた。

イ 新規就農者の課題改善支援

認定新規就農者7名の個別課題である単収・品質向上や6次化加工品の商品性向上など技術及び経営の改善に取り組んだ。



新規就農者励ましの会

(2) 女性農業者の確保・育成

ア 次世代リーダーの育成

今年度は女性農業経営士を認定することはできなかった。今後は2年に1人の申請を目標とすることから，つわぶき会や，生活研究グループの役員会でより広い視野から，候補者を検討していく。

イ 若手女性農業者間のネットワークづくりの支援

Web会議で鹿児島市の女性農業経営士の活動に刺激を受け，1名が県農業女性リーダーネットワーク研修（鹿児島市）に参加するなど前向きな動きがみられる。



5 今後の課題

- (1) 青年農業者のプロジェクト活動の実践支援
- (2) 新規就農者の個別課題解決支援
- (3) 農業経営に参画する次世代女性リーダーの育成支援や若手女性農業者間でのネットワークづくり

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

- 下村（青年農業者）
- 片山（新規就農）
- 吉田（女性農業者）
- 新川，佐藤

若手女性農業者交流会（Web）

課題名 屋久島の特性を活かした産地育成(畑作)

【成果の要約】

ばれいしょの主力地域である麦生・原・小島の合計35地点のほ場を土壌分析したところ、石灰（カルシウム）と腐食（CEC）の値が基準値よりも低い傾向があることがわかった。

土壌への石灰（カルシウム）と腐食（CEC）の供給のため、作付け前講習会等で石灰資材や牛ふん堆肥の施用を推進した。

ばれいしょの疫病防除作業の省力化の手段として、ドローン防除を昨年から紹介し、実施希望調査の結果、3戸の生産者で延べ面積6.2haのドローン防除を実施した。

1 対象

J A 種子屋久屋久団地野菜部会24戸

2 課題を取り上げた理由

ばれいしょは、本島畑作の重点品目であるが、疫病・菌核病等の発生や地上部の生育不良によって生産が不安定である。しかし、農薬による防除や土壌改良はほとんど行われていない。そこで、スマート農業技術を活用した防除作業省力化や土壌分析結果を基にした土壌改良資材施用の推進を行い、生産安定につなげる。

3 活動内容

(1) 土壌分析の実施

島内のばれいしょ生産における主力地域である麦生・原・小島地区において、合計35地点の土壌分析を実施した。

(2) 土壌改良資材の推進

土壌分析の結果から、石灰（カルシウム）と腐植（CEC）の割合が基準値より少ない傾向があることがわかったため、ばれいしょ作付け前講習会や個別巡回時に石灰資材と牛ふん堆肥の施用を推進した。

pHとCa（カルシウム）を上げるには

- pHをあげたいとき
【通常の石灰資材を入れましょう】
・サンライム ・糖粒苦土石灰 等
- pHをあげたくないとき
【「畑のカルシウム」を入れましょう】
「畑のカルシウム」の主成分は硫酸カルシウムです。通常の石灰資材に比べて、水に溶けやすいため植物が吸収しやすく、酸性性なので土のpHにも影響しません。追肥として、栽培期間中に施用することも可能です。
※「畑のカルシウム」の常備在庫はありませんので、別注文となります。

【石灰資材の使用のポイント】

- ・10a当たり 3～5袋（60～100kg程度）
- ※通常の石灰資材は入れますとアルカリ性に偏るので、注意！！
- ・遅くとも植付けの1週間前に入れる
- ・肥料と一緒に散布しない（チン成分が流れる可能性あり）

CEC（保肥力）を上げるには

【堆肥（牛ふん）を入れましょう】

鶏糞は肥料成分が多く、「土づくり」にはあまり貢献しません。牛ふんは腐植の基となる繊維質が多いため、肥料を保持する能力が上がります。

マルイ有機 鶏糞主体 △
屋久島牛ふん堆肥 牛ふん主体 ○

【堆肥の使用時のポイント】

- ・10a当たり 1.5～2t程度
- ・完熟したもの（愚臭がしない）を使う
- ・遅くとも植付けの1ヶ月前に入れる
- ・投入後は1～2回ほど耕転する

【問い合わせ先】
JA種子屋久 屋久島支所 TEL 0997-47-2037
屋久島町 農業振興課 TEL 0997-43-5900
屋久島事務所 農林普及課 TEL 0997-46-2236



講習会での説明

土壌改良推進チラシ

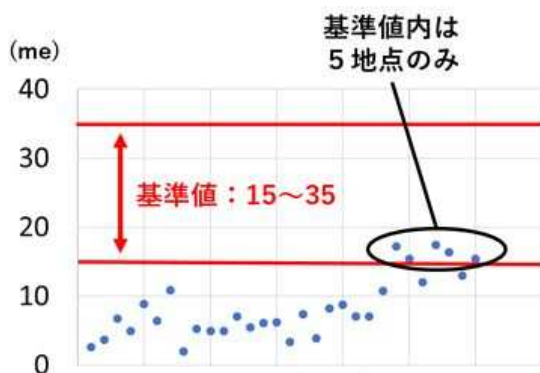
(3) ドローン防除による疫病対策の実施

野菜部会員に向けてドローン防除の希望調査を実施したところ、3戸の生産者が希望した。予防防除として令和5年12月6日と令和6年1月15日の2回、延べ面積で6.2haのドローン防除を実施した。

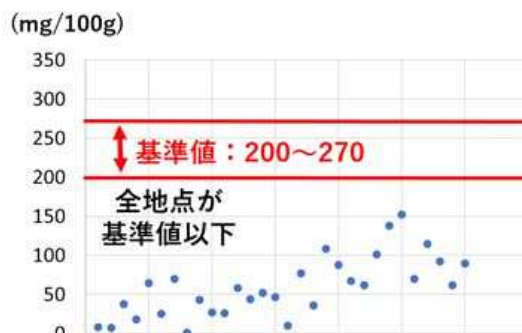
4 活動の成果

(1) 土壌分析の実施

腐植（CEC）においては、基準値の範囲内にあるほ場は5地点だけだった。また、石灰（カルシウム）においては、全ての地点で基準値より下回っていた。



腐植（CEC）の分布



石灰（カルシウム）の分布

(2) 土壌改良資材の推進

今作で苦土石灰を使用した小島の生産者ほ場では、今のところ単収2.0 t / 10a以上の収量が見込まれている。

(3) ドローン防除による疫病対策の実施

令和6年1月15日のドローン防除では、生産者向けの実演会も併せて開催したところ新規就農者2名を含む9名の生産者が参加した。また、実演会後のアンケート調査の結果、「今後、ドローン防除を実施を検討したい」と回答した生産者がほとんどだった。



ドローン防除実演会の様子



感水試験紙による散布量の見える化

5 今後の課題

- (1) 土壌分析の継続によるデータの蓄積
- (2) 石灰資材や牛ふん堆肥の施用による効果検討
- (3) ドローン防除による疫病対策の実施及びコスト削減対策の検討

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇佐藤

課題名 屋久島の特性を活かした産地育成（果樹）

【成果の要約】

『たんかんの摘果マニュアル』を果樹農家や関係機関等、約300戸に配付し、適正着果量18果/㎡を基準とした摘果モデルの普及を図った。

幼木の早期成園化に向けた管理方法を3カ所で検討した。尾之間試験園では計画密植栽培や機械化体系の植栽モデルが整備できた。

生産履歴台帳を活用した技術改善に5戸が取り組んだ。また、たんかんK-GAPに取り組むJA果樹部会の生産履歴台帳を元に、栽培管理暦を作成した。

1 対象

果樹栽培農家285戸，JA果樹部会181戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島では、ぼんかんやたんかん主体の果樹経営が行われているが、主力品目である、たんかんの単収の低下や隔年結果による生産の不安定が課題である。

このため、生産性の低い老木の改植と幼木の早期成園化に向けた取組や隔年結果対策として適正着果量18果/㎡を基準とした摘果モデルの普及が必要である。

3 活動内容

(1)たんかんの隔年結果対策

『たんかんの摘果マニュアル』を果樹農家や関係機関等、約300戸に配付し、適正着果量18果/㎡を基準とした摘果モデルの普及を図った。また島内5カ所（永田，小島，原，麦生，春牧）に摘果モデル樹を設置し、摘果講習会の開催や現地就農トレーナー研修で農家や関係機関への理解促進を図った。

(2)早期成園化の実践支援

トロイヤーシトレンジ台たんかんは異常落葉症に抵抗性があり、屋久島においても令和元年以降、年間2,000～3,000本の導入が進んでおり、早期成園化が必要である。そこで、令和元年度より「目標単収1.2t/10a」早期成園化モデル事例として、3戸に実証展示ほを設置し、樹冠拡大調査や現地検討を行った。

また、町営尾之間試験園においても、SS体系や動噴体系、計画密植体系のほ場を整備し、地域のモデルとなるよう、植栽間隔や台木の検討を行った。

(3)生産履歴を活用した技術改善支援（たんかん K-GAP）

島内ではミカンハダニ、ミカンサビダニ防除が課題となっており、効率的かつ効果的な防除が必要である。そこで昨年に続き、ミカンハダニの簡易的な薬剤感受性試験を行い、薬剤効果を確認した。

また、たんかんK-GAPに取り組む生産者の生産履歴台帳を活用し、島内の防除実態把握を行い、作業管理暦作成にあたった。

4 活動の成果

(1) たんかんの隔年結果対策

令和2～3年度の調査結果から「適正着果量18果/㎡」で連年安定生産できることが明らかとなり、『たんかんの摘果マニュアル』を作成した。本マニュアルは、島内の果樹農家や新規就農者、青年農業者、関係機関等に合計300部を幅広く配布し、島内5カ所（永田、小島、原、麦生、春牧）の摘果モデル樹を活用した、摘果講習会の開催や現地就農トレーナー研修で農家や関係機関への理解促進が図られた。



奄美×屋久島 たんかん産地間交流



たんかんモデル樹の摘果

(2) 早期成園化の実践支援

令和元年度から実施している「目標単収1.2t/10a」の早期成園化モデルの3戸に対して、樹冠拡大調査や果実品質調査を行った。しかし、本年度中に目標に達した農家は0戸であった。これは、台風による倒伏やミカンハダニによる被害で、樹冠拡大の低下を招いたことが挙げられる。その他、過度な着果負荷による隔年結果を招いている苗木も見られた。また、町営尾之間試験園においても、SS体系や動噴体系、計画密植栽培のほ場を整備し、地域のモデルとなるよう、植栽間隔や台木の検討を行った。

(3) 生産履歴を活用した技術改善支援（たんかん K-GAP）

3名の生産履歴を活用し、防除の農薬散布履歴や果実の病害虫被害状況、防除効果の聞き取りを行い検討した結果、ミカンハダニの薬剤効果が低下している可能性があった。また、ミカンサビダニの散発的な発生によって防除適期がずれていることも考えられた。この結果を基に令和5年度の防除管理暦を作成した。

5 今後の課題

(1) たんかんの隔年結果対策

継続した隔年結果防止対策の実施

(2) 早期成園化の実践支援

苗木育成の技術強化

(3) 生産履歴を活用した技術改善支援（たんかん K-GAP）

効率的・効果的防除方法の検討

6 担当した普及職員（〇はチーフ） 〇下村

課題名 屋久島の特性を活かした産地育成（茶）

【成果の要約】

- ・栽培基礎技術及び「屋久島茶」のPR活動を支援することができた。
- ・畑かん水の通水した地区に対し、畑かん水の多目的利用法や具体的な活用法を紹介することができた。

1 対象

屋久島茶業振興会 16戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島町の茶生産者は、有機栽培農家が半数を占める。茶の経営を安定させるためには慣行栽培・有機栽培の基礎技術習得が必要不可欠である。また、近年の茶市場価格の低迷を受け、茶市場における競争力の強化と多種多様な茶種の生産による市場外の相対取引先の確保が必要となっている。畑地かんがいの通水した茶園も広がっており、水利用法の周知も求められつつある。

そのため、農業者の栽培基礎技術向上、「屋久島茶」のPR活動、畑地かんがい水の多目的利用の支援を行った。

3 活動内容

(1)栽培技術向上支援

秋整枝検討会を開催し、秋整枝の意味や、秋整枝の位置などについて説明した。現地巡回指導では慣行園、更新園、有機茶園など茶園の状況に応じた秋整枝の方法について検討し、農業者の技術向上に努めた。

現地就農トレーナー研修では、指導農業士とともに、新規就農者に対し、茶園の管理法や秋整枝の時期や位置について指導した。



秋整枝現地検討会

(2)「屋久島茶」のPR支援

イオン鹿児島店で「屋久島茶」のPR活動の支援を行った。島外での大手量販店でのPR活動は初めての試みであった。



イオン鹿児島店でのPR活動

(3)畑かん水の多目的利用支援

令和5年5月～6月に畑地かんがい用スプリンクラーを活用して、チャノホソガの病害虫防除を実証した。また、畑地かんがい用水を利用した病害虫防除、散水ルール策定の策定、設備の管理方法、水利用組合の設立について、県、町、資材業者などの関係者で検討会を行った。また、普及だよりにて散水防除を紹介した。



畑かん水の利用検討会

4 活動の成果

(1) 栽培技術向上支援

新規就農者の茶園は指導農業士の指導や、適期の技術支援により充実した茶園に仕上がった。

(2) 「屋久島茶」のPR支援

イオン鹿児島店で販売することによって、「屋久島茶」の知名度向上を図ることができた。来店者も「屋久島が茶の産地とは知らなかった」という意見が多かった。また、イオン鹿児島店での販売をきっかけに、県茶業振興大会での出店することになった。



指導農業士による技術支援

(3) 畑かん水の多目的利用支援

農薬を使った化学的防除だけでなく、散水による物理的防除の理解を促進できた。令和6年度より畑かん水による病虫害防除を予定している。

5 今後の課題

(1) 畑地かんがい水を活用した病虫害防除などの多目的利用

(2) 茶生産者の安定した経営支援

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇片山

課題名 屋久島の特性を活かした産地育成（畜産）

【成果の要約】

屋久島子牛の生産基盤の維持・拡大へ向け、生産者全戸の課題を整理し、経営目標へ取り組みが明確となった。また、自給粗飼料の増加へ向けた飼料作物3種類の実証により、降水量の多い屋久島においても高い収量の確保が実証された。

生産・商品性向上対策の実施により、高い繁殖成績が維持されるとともに、子牛発育が全体として向上し、市場平均よりも屋久島子牛が高値で取引された。

1 対象

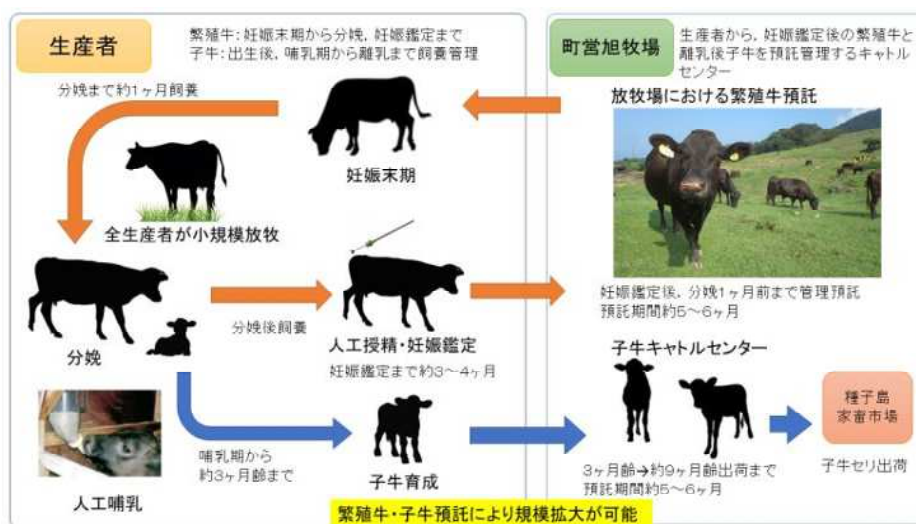
屋久島町和牛振興会19戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島の肉用牛生産は農業生産額において2位の主要な品目の一つであるが、生産者の高齢化が進んでいるため、後継者の確保や生産基盤の維持・拡大が必要である。また離島であるため飼料や生産資材が割高であることや、降水量が多く粗飼料生産・調整が難しく、肉用牛経営には厳しい条件となっている。

このような中、屋久島子牛の産地継続と収益性が高く魅力ある肉用牛経営を目指し、規模拡大を指向する生産者の育成による産地基盤の維持・拡大と、生産性及び子牛商品性の向上による収益性の改善に取り組んだ。

（参考）町営牧場を活用した屋久島型の繁殖牛管理と子牛生産



○生産者が全戸小規模な放牧地を設置（屋久島型放牧）しており、牛舎面積と施設整備費を抑制している。
○繁殖牛及び子牛預託により規模拡大が可能となり、粗飼料生産のための大型機械への投資も抑制している。
○生産者は牛の預託により、「分娩」と「人工授精」、「子牛の初期育成」に集中管理が可能となり、生産性向上が図れる。

(1) 規模拡大モデル農家の育成

後継者を有する生産者及び規模拡大の志向農家を対象とし、自給粗飼料の確保対策、増頭に向けた育成牛の管理指導、キャトルセンターの活用と組み合わせた既存牛舎の活用方法などの、規模拡大の実践支援を行った。

併せて、今後の普及活動へ向けた課題整理のため、生産者全戸に対し、生産者の現状

把握と今後の意向調査を実施し、規模拡大の可能性と実践へ向けた具体的方法について調査・検討を行った。

(2) 生産・商品性改善モデル農家の育成

収益性の高い肉用牛経営を確立するため、母牛の繁殖成績の向上と子牛の商品性向上に向けた飼養管理技術指導を行った。個別課題の改善が必要とされる生産者に対し、改善モデル農家として定期巡回を実施し飼養管理指導を行った。またキャトルセンターの子牛発育向上へ向けて飼養管理指導も行った。



わい性ネピアグラス実証ほ

4 活動の成果

(1) 規模拡大モデル農家の育成

ア 生産基盤の維持に向けた取り組み

令和5年度の市況として子牛価格が低迷したことに伴い、生産性の低い繁殖牛の淘汰を行ったことなどから、屋久島町の繁殖牛頭数はやや減少した。更新用の育成牛については計画通り確保された。

生産者全体の現状把握と、今後の規模拡大へ向けた課題が整理され、今後の経営目標が明確になった。



キャトル子牛の発育調査

イ 自給粗飼料の確保対策

粗飼料の目的別に5種類の牧草の実証ほを設置し調査を行った。3品種で降水量が多い屋久島においても高い収量の確保が可能であることが実証された。

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ・わい性ネピアグラス（放牧・青刈り用） | 平野地区：生草8.6t／2回刈 |
| ・ソルガム（多収高栄養・青刈り用） | 旭牧場：生草9.5t／2回刈 |
| ・シロヒエ（水田用） | 平野地区：生草4.2t／1回刈 |

上記3品種と放牧用トランスバーラ、子牛用テフグラスについては、令和6年度も継続調査を実施する。

(2) 生産・商品性改善モデル農家の育成

関係機関と連携し生産性・子牛商品性の向上に取り組んだ結果、町全体の平均分娩間隔は、387.9日と良好な成績を維持できた。また子牛発育においても改善が見られた。

また種子島中央家畜市場においても、屋久島子牛は発育がよく高値で取引された。

- | | |
|-----------------|----------------------------|
| ・めす子牛DG | 0.99 (R4) → 1.00 (R5) kg／日 |
| ・去勢子牛DG | 1.00 (R4) → 1.10 (R5) kg／日 |
| ・出荷時体重（めす去勢平均） | 屋久島279kg 市場比較+11kg |
| ・子牛売却価格（めす去勢全体） | 屋久島582,824円 市場比較+52千円 |

5 今後の課題

屋久島子牛の生産基盤を維持・拡大対策と、収益性向上のため生産・商品性向上対策の継続。自給粗飼料の増加対策の実施。畜産ICTの活用検討。

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇新川

課題名 屋久島の農林水産物を活かした6次化ビジネスモデルの育成

【成果の要約】

販路拡大セミナーにおいて参加者のマーケティング力向上を支援した。参加した茶農家は初の島外販売会を体験し、販路拡大につなげた。果樹農家は、さばぶしとらっきょうを組み合わせた商品を開発し、ふるさと納税返礼品を製造した。

ビジネスモデル事例づくりでは、屋久島産の牛を屋久島で食することを検討し、屋久島の一貫生産農家の枝肉を地元ホテル等へ卸せるようにした。生産から肥育まで安定した出荷が確保され、地元のホテル等に安定的に供給ができるようになった。

1 対象

6次産業化志向農家16戸

(※連携機関 屋久島自然の恵み販売拡大協議会 事務局：町産業振興課)

2 課題を取り上げた理由

平成27年度に「屋久島自然の恵み販売拡大協議会」が結成され、関係機関が連携し、6次産業化に取り組むための専門的な知識・技術、手法、情報提供等の支援に取り組んできている。6次産業化の推進にあっては、農業経営と6次産業化の経営の位置づけを明確にし、所得向上につなげていく必要がある。

3 活動内容

(1) 6次化によるビジネスモデルの確立支援

6次産業化に向けたビジネスモデルの育成

ア 商品性向上支援

今年は販売促進力向上のため、販路拡大セミナー（熊毛支庁総務課企画係主催）において参加者のマーケティング力向上を支援をした。

7/26の販路拡大セミナーに果樹農家1戸と茶農家1戸が参加。商談の基本から講師（伊勢丹バイヤー経験者）を相手に模擬商談を実施、値段交渉の駆け引き、在庫管理能力まで実践を想定した研修を実施した。

イ ビジネスモデル事例づくり

屋久島で牛生産から肥育まで実施している一貫生産農家の牛肉を枝肉加工し、屋久島内のホテルで消費できないか関係者を含め協議、

4 活動の成果

(1) 6次化によるビジネスモデルの確立支援

6次産業化に向けたビジネスモデルの育成

ア 商品性向上支援

販路拡大セミナーにおける実践さながらの商談で生産者は改善すべき点を認識し、その後の販売会で実践した。茶生産者においては、イオン鹿児島において初の島外販売会を体験、商品陳列や売れ筋商品の販売等、多くのことを体験、学んだ。

果樹農家は果樹にこだわらず、さばぶしとらっきょうを組み合わせた商品を開発し、屋久島町のふるさと納税返礼品に採用になった。

イ ビジネスモデル事例づくり

生産から肥育まで一貫生産を指導。元来高品質の牛肉は生産されていたことから屋久島産の牛を屋久島で食することを関係者で検討，結果地元のホテル等への卸ができるようになった。生産から肥育まで安定した出荷が確保され，地元のホテル等へ安定した供給が実施されている。

生産者は自分で生産した牛が地元で消費されることに誇りをもっている。更に一貫生産体制を充実させ，地元ホテル等への安定供給を強化する。



イオンでの屋久島茶販売



ホテル用にスライスされた肉

5 今後の課題

- (1) 専門家と連携した商品の付加価値づくりと販売力の強化
- (2) 所得向上につながる観光と連携した6次産業化モデルづくり

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇吉田，下村

Ⅱ 実証・展示ほ等成績

課題名 新規登録農薬「フリントフロアブル25」の効果実証

【成果の要約】

サツマイモ基腐病における定植前の土壌処理剤として新たに登録拡大となった「フリントフロアブル25」と「フロンサイドSC」の効果実証を行ったところ、収穫時の腐敗株発生率はフリントフロアブル25区は11%、フロンサイドSC区は3%となった。

1 目的

島内の焼酎用サツマイモ生産においては、サツマイモ基腐病被害が依然として大きく、生産性が低い状況が続いている。そこで、新規登録農薬「フリントフロアブル25」の屋久島における効果実証を行った。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

屋久島町原地区 A氏

(2) 実証内容

「フリントフロアブル25」の定植前土壌処理によるサツマイモ基腐病抑制効果の実証

(3) 耕種概要等

1) 供試品種：「みちしずく」

2) 試験設定：実証区「フリントフロアブル25」 250倍 100L/10a 散布

対照区「フロンサイドSC」 500ml/10a 100L/10a 散布

2) 育苗状況：バスアミド微粒剤による土壌消毒を実施。バイオ苗を購入・育苗し、育苗期間中のサツマイモ基腐病の発生は認められなかった。

3) 栽培履歴：前作は緑肥を栽培

4) 定植日：令和5年5月12日～29日（黒マルチ）

5) 収穫日：令和5年11月8日

3 調査結果等

(1) 地上部のサツマイモ基腐病の罹病状況について

定植後、30日・60日の株元調査ではどちらの区もサツマイモ基腐病の発生は認められなかった。その後の達観調査でも葉の黄化などは認められなかったが、収穫時の株元調査では腐敗株発生率はフリントフロアブル区では11%、フロンサイドSC区では3%となった。

表1 本ほにおける発病状況調査

区 名	調査時期				
	30日後 5/31	60日後 6/30	90日後 7/25	120日後 8/26	収穫直前 11/8
フリントF25	無	無	無	無	少
フロンサイドSC	無	無	無	無	少



写真1 フリントフロアブル25区
(令和5年10月25日撮影)



写真2 フロンサイドSC区
(令和5年10月25日撮影)

(2) 収量調査結果について

調査を行った各区20株においては、サツマイモ基腐病及び腐敗症状は認められなかった。また、1いも重はフリントフロアブル25区が310g、フロンサイドSC区が340gとあまり差がなかったが、1株いも個数がフリントフロアブル25区が8個、フロンサイドSC区が5個となったため、単収はフリントフロアブル25区の方が高くなった。

表2 収量調査（連続10株×2カ所調査）

区 名	収量 (kg/10a)				歩留まり (%)
	出荷量	出荷不可	うち基腐病	合計	
フリントF25	5,167	52	0	5,219	99
フロンサイドSC	3,542	60	0	3,602	98

注1) 出荷不可：1いも重30g未満、病虫害等のいも



写真3 フリントフロアブル25区



写真4 フロンサイドSC区

4 考察

フロンサイドSC区のほ場は、フリントフロアブル25区のほ場よりもスコップが刺さりやすく、土壌物理性が単収に影響した可能性があると考えられる。また、土壌処理におけるサツマイモ基腐病抑制効果はフロンサイドSCの方が高いと考えられる。

5 普及性及び残された課題

サツマイモ基腐病対策としての土壌処理剤としては、フロンサイドSCの推進を行っていく。また、フロンサイドSCについては、令和5年6月に「定植後の茎葉散布」が追加登録されているので、これについての効果実証も検討する必要がある。

課題名 ミカンハダニの薬剤抵抗性の検討

【成果の要約】

屋久島で使用されているダニ剤ごとの薬剤抵抗性を確認することができた。この結果から、ダニ剤の特性把握にもつながり、適切な使用方法が分かった。

青年プロジェクト活動としても取り組んだことで、青年の観察力が高まり、早期防除につながった。

1 目的

生産履歴を確認した結果、ミカンハダニ防除について苦慮しており、ハダニ剤の薬剤抵抗性を検討する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

K園（麦生） 採取日：11月29日

(2) 設置の概要

試験期間：令和5年11月29日～12月13日

試験樹：たんかん「垂水1号」トロイヤールシトレンジ台 5年生

試験方法：ミカンハダニの発生ほ場からサンプルを集め、供試剤をスプレー散布し、死虫率を定期的に調査した。（2日後、5日後、8日後、14日後）

調査区の構成：各処理3反復

試験区	供試薬剤	ダニエモンフロアブル	4,000 倍
		ファインセーブフロアブル	4,000 倍
		ダニコングフロアブル	2,000 倍
		ダニゲッターフロアブル	2,000 倍
		サンマイト水和剤	3,000 倍
対照区	無処理（採取日に水をスプレー散布）		

(3) 調査項目

死虫率

3 調査結果等

供試薬剤5剤のうち、ダニコングフロアブルは試験開始から7日後に効果が見られたが、その後変化はなかった。ダニゲッターフロアブルも7日後に効果が見られ、14日後まで持続した。ダニエモンフロアブル、ファインセーブフロアブル、サンマイト水和剤は効果が見られなかった。（図1）。

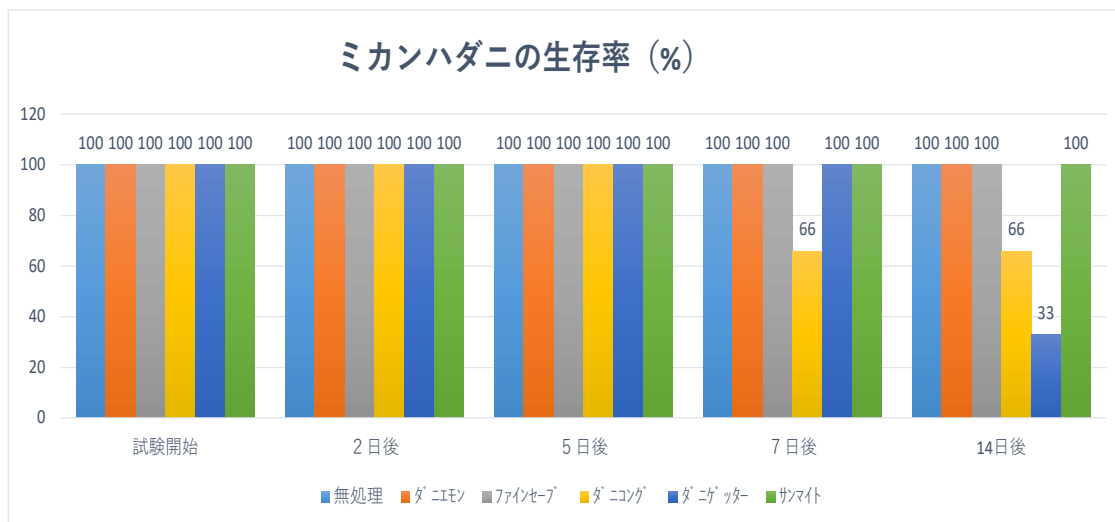


図 ミカンハダニの生存率

調査日：11月29日（採取日），12月1日（2日後），12月4日（5日後），
12月6日（8日後），12月13日（14日後）



ミカンハダニの頭数を確認



試験状況の様子

4 考察

今回の試験結果から、ハダニ剤の効果を検証することができたものの、効果の検証は最考する必要がある。ハダニは気象条件等によって発消長に差が出ることから、日頃のほ 場観察や協力農家との連携が重要である。

また、屋久島で使用されているミカンハダニ剤ごとの薬剤抵抗性を確認することができた。この結果から、ダニ剤の特性把握にもつながり、適切な使用方法が分かった。

5 普及性及び残された課題

ハダニの発消長の把握，発生時期別の薬剤検討，薬剤ごとの特性把握

課題名 屋久島における粗飼料自給率の向上

【成果の要約】自給粗飼料の増産へ向け、わい性ネピアグラス、高糖分ソルガム、シロヒエを実証し、降水量の多い屋久島においても高い収量を確保することができた。生産者の飼料畑に合わせた品種選択の可能性が拡大した。

1 目的

屋久島町は降水量が多く、収穫・乾燥調整が難しく粗飼料生産に適している環境とは言いがたい。また粗飼料用のほ場も狭小な所が多く、大型機械による作業も難しい。このような中で、自給粗飼料の増加による飼料コスト削減へむけ、屋久島の気候・環境に適した粗飼料品種を検討するため、実証ほを設置し調査を行った。

2 実証・展示ほの概要

【実証1】わい性ネピアグラス

（設置目的）狭小地及び、小規模な放牧地への導入

(1)設置場所 屋久島町平野地区

(2)設置の概要

- ・植え付け日 令和5年3月7日 ・植え付け面積 11a
- ・植え付け手順 既存ほ場から苗採取して100cm幅条植え（苗50cm間隔）
- ・生育状況



3/6株の採取



苗の調整



3/7条植え100cm幅



4/13発芽状況(37日後)



5/9生育状況(63日後)



6/26生育状況(111日後)

【実証2】高糖分ソルガム

（設置目的）夏場の高栄養及び高収量確保，大型機械対応ほ場

(1)設置場所 屋久島町旭牧場

(2)設置の概要

- ・品種名 シュガーグレイズ（雪印種苗）高糖分ソルガム
- ・播種日 令和5年6月5日 ・植え付け面積 50a
- ・生育状況



8/6生育状況（62日後）



8/9台風後の状況（65日後）



再生状況（1回刈後15日）

【実証3】シロヒエ（ミレット）

（設置目的）旧水田などの湛水するほ場，降水量多い地域への導入

(1)設置場所 屋久島町平野地区

(2)設置の概要

- ・植え付け日 令和5年5月10日，29日 ・植え付け面積 20a



6/9たん水でも発芽(11日後)



6/29出穂状況(51日後)



8/9台風倒伏のため放牧給与

3 調査結果

収量調査

品種名	特徴	生育ステージ	播種日	調査日	経過日数	高さ	生草収量	乾物率	乾物収量	備考
1 わい性ネピアグラス	晩成	生育期	3月7日	7月10日	125	180	4,250	24.5	1,041	2回刈＋放牧
2 高糖分ソルガム	晩成	生育期	6月5日	8月6日	62	173	5,200	22	1,144	2回刈
3 シロヒエ	早生	出穂期	5月19日	7月5日	47	162	3,840	18.8	722	1回刈

4 普及性及び残された課題

記載した3種は令和6年度も継続調査。放牧用トランスバーラ（植付済）と，子牛用テフグラスについて調査予定。

課題名 畑かん水の多目的利用の導入検討

【成果の要約】屋久島でも、チャノホソガの産卵時間を重点に萌芽期～2葉期に間断散水を行うことで、三角巻葉の発生を抑制できることが確認できた。茶生産者が次年度より畑かんを利用することになった。

1 目的

永久保地区は、令和4年10月に中山間総合整備事業により、永久保地区において畑かん工事が完了し、茶園に通水された。この永久保地区には、茶農家が3戸ある。屋久島の茶園における畑かんの活用技術についての知見は乏しい。今回、病虫害防除及び潮風害対策に、畑かん散水の活用を茶農家3戸への導入を検証する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 実証地区

永久保地区

(2) 調査対象

永久保地区の茶生産者3戸

(3) 対象病虫害

チャノホソガ。製茶品質に影響の大きい重要害虫。二・三番茶期の発生が多い。三角葉内に虫糞を充満させ、水色を赤くし製茶品質を低下させる。



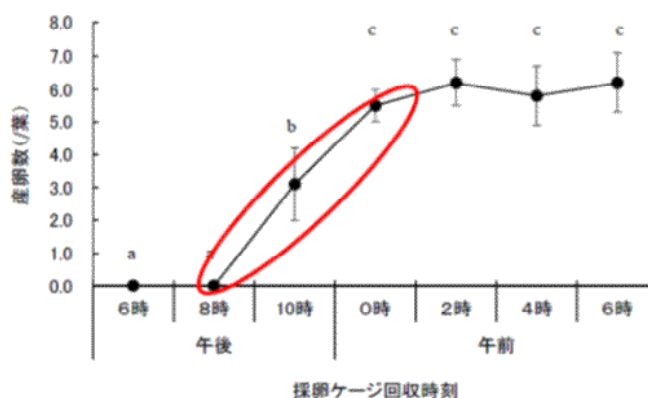
三角葉巻（中に虫糞が品質に影響する）



三角葉巻中の幼虫と虫糞

(4) 調査内容

チャノホソガの産卵は、午後8時～午前0時の夜間に重点的に行われます。産卵時間を重点的に、萌芽期～2葉期に1分散水5分停止の間断散水を行う。調査した品種は、早生品種の「つゆひかり」と晩生品種「おくみどり」で、摘採時期における巻葉発生数（枚/ m^2 ）を調査した。



各時刻帯におけるホソガ累積産卵数の推移

(5) 調査期間

令和5年5月16日～6月2日

3 調査結果

散水区の巻葉発生数は農薬散布区とほぼ同数であった。屋久島でも、チャノホソガの産卵時間を重点に萌芽期～2葉期に間断散水を行うことで、三角巻葉の発生を抑制できることが確認できた。

	つゆひかり	おくみどり
農薬散布区	2	7
散水区	2	9

巻葉発生数（枚/m²）



散水時間・間断散水の設定



三角巻葉の調査

4 考察

屋久島でも、チャノホソガの産卵時間を重点に萌芽期～2葉期に間断散水を行うことで、三角巻葉の発生を抑制できることが確認できた。

5 普及性及び残された課題

クワシロカイガラムシが発生しなかったため、実証することができなかった。スプリンクラー散水を活用してクワシロカイガラムシの防除を実証する。

クワシロカイガラムシやチャノホソガの発生予察を行う。

III 參考資料

Ⅲ 参考資料

【令和5年の主要作物生育経過】

果 樹

【ぽんかん】

昨年より10日早い4月10日に満開となり、着花量は有葉花主体で、最終的な着果量は平年より多かった。

果実肥大は前半から平年より高く推移し、大玉傾向となった。果実品質は秋季の乾燥を受け、高糖低酸と平年以上の仕上がりとなった。

8月9日に台風6号が襲来し、日量303mmの降雨をもたらし、風傷果や落果の発生が見られたものの、被害は限定的であった。

10月中旬以降の平均気温は平年より高く、乾燥気味の気候で高品質な果実に仕上がったが、12月10日以降の降雨・高温により水腐れ症の発生が増加した。

【たんかん】

昨年より5日早い4月8日に満開となり、着花量は直花と有葉花が半分ずつでやや多く開花時期のばらつきが見られた。最終的な着果量は平年より少なかった。

果実肥大はぽんかん同様、高く推移したが、島内全体でみるとM-L玉と着果量が多かったことで小玉傾向になった。果実品質は高糖低酸と平年以上の仕上がりとなった。

台風6号により、風傷果やかいよう病の発生が見られたものの、被害は限定的であった。一方、秋期の高温乾燥により、ミカンハダニやミカンサビダニの発生が多く見られた。

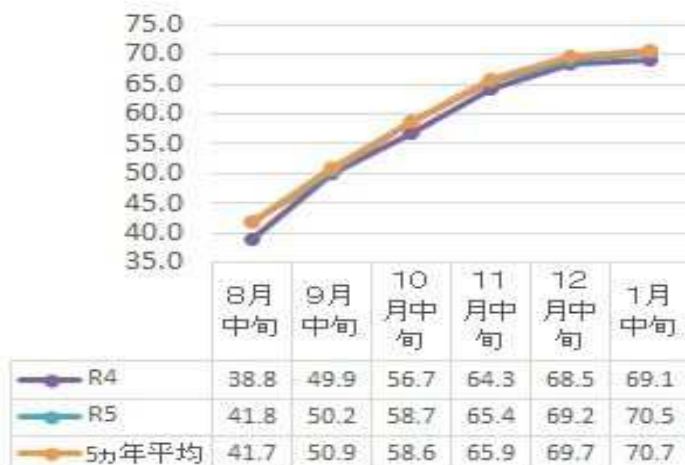
ぽんかんの果実肥大の推移



R5ぽんかんの果実品質（11月中旬）

年度	糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
R 5	10.3	0.73
R 4	9.8	0.94
平年	10.1	0.90

たんかんの果実肥大の推移



R5たんかんの果実品質（1月中旬）

年度	糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
R 5	11.8	0.76
R 4	10.4	0.78
平年	10.5	0.96

茶

令和5年産一番茶は、冬季の気温が高く3月中旬以降の気温が高めに推移したことで、早生品種を中心に平年よりやや早い生育開始となった、被覆後の色のりが進まず摘採計画が難航したところもあったが、摘採開始は、3月28日となった。県茶市場の新茶の取引開始は、昨年より1日早い3月29日となった。

県茶市場での市況については、芽合い、色沢、水色良好な製品は、4,000円以上で取引されたものの、繰越在庫が多いとの見通しがあったことや、例年より早い出回りとなったことから、慎重な買いが目立ち、芽が良いものの、色のり不十分な製品は、当初から1,000円台で取引されるなど、品質による価格差の大きい相場展開となった。県本茶平均価格は、前年比92%となった。

二番茶は、一番茶後に夜温が低い日が多く、日照時間も平年より短かったこともあり、一番茶摘採後、50日前後での生産開始となった。本茶平均価格一番茶配合用や飲料原料用の引き合いが、昨年に比べ低調となり、品質面でも病害虫の被害も多くみられたため、被覆製品、露地製品ともに軟調な相場展開となり、前年比88%となった。

年間を通して生葉を集約し、二番茶を緑茶荒茶ラインによる紅茶製造の取組によりコスト低減に成功した生産者もあった。また、茶工場操業の効率化を図った一方で、茶園管理においては更新により茶樹の樹勢回復に努めた。また、有機栽培の面積も増加傾向である。

各茶工場で商品開発、販路開拓の取組がなされている。今年度は、イオン鹿児島店での「屋久島茶」の販売PR活動を実施した。

野菜

【ばれいしょ】

11月の降水量が多く気温も高かったため、疫病や軟腐病、夏疫病、菌核病等の発生が多く見られた。また、12月は夜温が低かったことなどから、菌核病等の発生も多く見られた。出荷は平年並の2月中旬より始まったが、萌芽揃いが遅れたことから、出荷のピークはややずれ込んだ。

疫病や軟腐病等によるいもの腐敗が多く生じ小玉傾向であるため、出荷量は計画の540 tよりも減少の見込みである。

【やまいも】

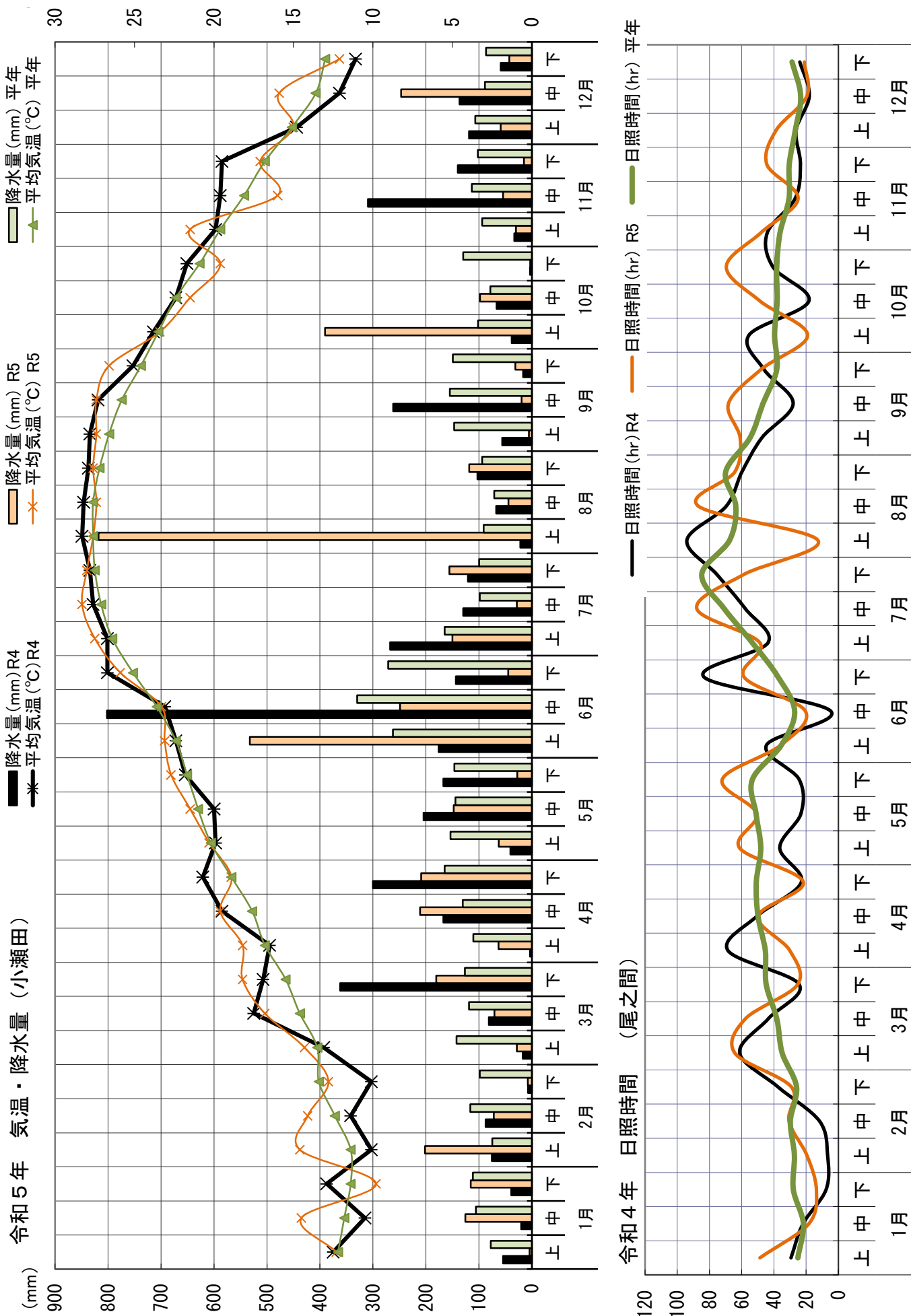
4月末から5月上旬にかけて植付され、台風14号の影響も無かったため、生育は概ね順調であった。出荷先メーカの要請で栽培面積は2 ha未満に調整されている。単収は個人差が大きいため土作り等の基本技術の見直しが必要である。出荷量は昨年より少ない25 t 前後となる見込みである。

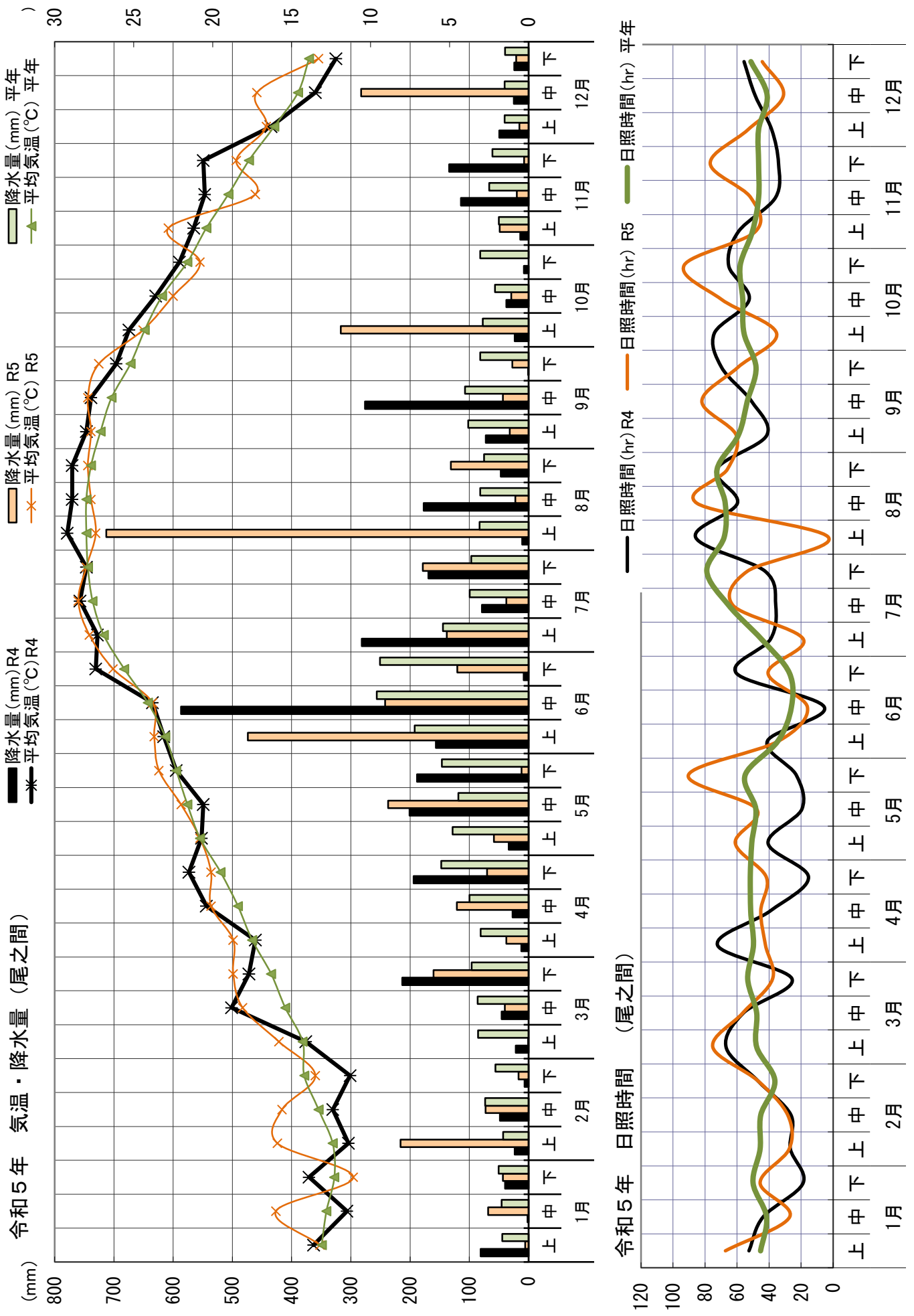
【さつまいも】

育苗初期の低温により育苗が遅れ、植付が全体的に遅れた。生育中期以降、特に台風14号通過後からサツマイモ基腐病の発生が見られた。しかし、生産者らの栽培管理の徹底や気象の影響により、被害程度は昨年よりも低い水準であった。一方、基腐病以外の腐敗が多く見られ、収量は伸び悩んだ。屋久島のR4年産平均単収：1,927kg/10a、(R3年産平均単収：1,848kg/10a)

【実えんどう】

品種は「まめこそう」である。台風の影響が無く、播種後に適度な降雨と気温推移で初期生育は例年になく良好であった。その後の気温が高く推移したため、モグリバエ類やウラナミシジミ等が多発し、生育も徒長気味となった。2月中旬には芯止まりが多く見られ出荷が早く終了し、出荷量は昨年よりも大幅に減少した。





【ミニ情報でつづるこの1年】

3 月



果樹就農トレーナー研修でせん定の基本を学ぶ！

2月28日、果樹就農トレーナー研修を開催したところ、新規就農者3名をはじめ、指導農業士、農業青年クラブなど計15名が参加した。はじめに座学形式で「果樹の土づくりとせん定」と題して講義を行った。その後、現地ほ場でたんかんのせん定講習を行い、樹形を意識したせん定の基本を説明した。参加者は真剣な面持ちでせん定技術を学んでいる様子であった。また、指導農業士からは「せん定は経験。恐れずにやろう。」など若手果樹農家を激励して頂いた。

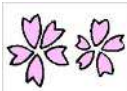
自給粗飼料確保に向けて研修会を開催

3月7日、肉用牛農家の放牧地において矮性ネピアグラスの植付研修会を開催し、肉用牛農家3人、関係機関2人が出席した。収量性と栄養価が高いという矮性ネピアグラスの特徴及び植え付ける準備から植付方法を説明した後、約11aのほ場に株の植付を行った。参加した農家からは、「飼料費が高騰する中、せめて粗飼料だけでも自給できるようにしていきたい」という前向きな意見があった。今後も、自給粗飼料確保に向けた取組みを支援していく。

令和5年産 一番茶の生育状況について

3月17日、鹿児島県経済連、農業開発センター茶業部、屋久島町産業振興課及び屋久島町茶業振興会で新芽の生育調査を実施した。定点調査の結果、昨年より5日程度早く生育していることが分かった。また、調査後には、個別に生産者の茶園で生育調査を実施し、予想される摘採予定日を確認した。この調査結果をもとに、生産者らは今年の摘採計画を立てる予定。今後も、良質な新茶が生産できるよう支援していきたい。

4 月



R4年産屋久島たんかん実績は堅調

令和4年産のJA屋久島たんかんは、数量335t（前年比90%）、販売金額135,697千円（同96%）、平均糖度10.7（前年度より0.7低い）という結果だった。資材や燃油高騰、コロナ禍という状況下においても、堅実な販売を見せた。台風や病害虫による影響があったものの、着色が進み、腐敗果も少なかった。一方、隔年結果が課題であり、農林普及課では産地一体となって、課題解決に向け、摘果方法の改善等図っていく。

R5年産一番茶は厳しい相場で生産スタート

屋久島の一番茶は昨年より4日早い3月30日にスタートした。県鹿児島茶市場における、屋久島茶の実績は、出回り量対比で昨年より1,200円/kg安い平均単価2,067円/kg（4月20日累計）と厳しい状況である。相場の厳しい状況から、二番茶以降を生産するかどうかを検討している農家もいる。今後も農林普及課では所得向上に向けて、関係機関・団体とも連携し、栽培・加工コストの削減、相対取引などの販路拡大等の支援を強化していく。

屋久島子牛市況について

熊毛郡の子牛セリが4月9～10日に種子島中央家畜市場で開催された。郡全体で658頭売却され、平均価格は568千円と前回開催の2月より30千円高となった。このうち、屋久島はめす22頭、去

勢31頭、計53頭が売却され、平均価格では郡平均よりめすが76千円高、去勢が41千円高の平均629千円となった。体重も全体平均より11kg多かった。今後も商品性の高い子牛生産へ向け、子牛生産マニュアルに沿った個別指導を関係機関一体で実施していく。

5 月



わい性ネピア、粗飼料実証ほの設置

稼ぐ力の高い屋久島の肉用牛繁殖経営を目指し、課題となる粗飼料自給率の向上を図るため、数カ所の粗飼料実証ほを設置した。放牧を含む屋久島型の生産体系に合わせたわい性ネピアグラスの実証ほでは、ほ場に散布した茎から順調に発芽し、周囲の雑草より生育速度が速く優位に生育している。今年度は他にバレイショ跡地を活用した夏作、子牛用粗飼料生産、水田跡地の利用など目的に応じた実証ほにより地域に適した粗飼料生産の可能性を探っていく。

令和4年度野菜実績/令和5年度計画検討会

令和5年4月26日に、屋久島町営農支援センターにてJA種子屋久野菜部会にて令和4年度の実績と令和5年度の計画について検討会を開催した。令和4年度は馬鈴薯では生育不良や疫病の発生により単収が低かったものの、価格は安定している。実えんどうでは病害虫が多発し単収が低かった。

令和5年度は馬鈴薯・実えんどうのどちらも生産者数は減少に伴って作付面積も減少する予定となっている。令和4年度から引き続き、抗シストセンチュウ品種やドローンによる防除の検討を実施していく。

二番茶の紅茶生産の取組

稼げる夏茶生産対策として、一部の農家では荒茶製造ラインを活用した紅茶製造を行っている。初めての取組であるが、良質な紅茶が製造できており、県鹿児島茶市場の平均入札価格は1,100円を超えている。また、熱風温度は緑茶製造より低めに設定するため、製造コスト削減に繋がっている。農家も二番茶における紅茶の製造に手応えを感じている。今後も農林普及課では、関係機関・団体とも連携し、所得向上に向けた支援を強化していく。

6 月



サツマイモ基腐病対策研修会開催

6月14日、営農支援センターにて、第1回サツマイモ基腐病対策研修会を開催した。三岳酒造のサツマイモ生産者を対象にサツマイモ基腐病について令和4年度の実績・令和5年度の取組について検討を行った。特に、6月7日にサツマイモ基腐病への登録が拡大した「フロンサイドSC」についての使用ポイントを説明したところ、参加した生産者も興味津々の様子だった。県内でも基腐病の発生が各所で確認されつつあるため、改めて「3ない運動」を推進していく。

JAぼんかん・たんかんの摘果講習会が開催される

6月20日～26日にかけて、島内11カ所でぼんかん・たんかんの摘果講習会が開催された。農林普及課からは、気象情報や生育状況、摘果方法などぼんかん・たんかんにかかる情報提供を行った。また、現地ほ場の講習ではJAや屋久島町、農林普及課の技術員が摘果の方法と見本樹を生産者に示し、併せて病害虫対策の指導も行った。今後は「屋久島のたんかんの摘果マニュアル」をたんかん生産者約400戸に配布し、隔年結果防止対策の徹底を促す。

7 月



たんかんの摘果研修会で新たな指標を普及

7月5～7日にかけて、島内5か所でたんかんの摘果研修会を開催し、生産者40名が参加した。研修会では、令和5年度地域振興推進事業で作成した「屋久島たんかんの摘果マニュアル」を元に摘果の実際や重点作業について説明した。また、新たな指標として「最終着果量18果/m²」のモデル樹を設置し、生産者と着果数の目合わせができた。生産者からは「1本の樹に思った以上に着果していることが分かった」などの意見が聞かれた。今後も隔年結果対策として継続した支援を行う。

屋久島のパッションフルーツをPR

7月8日、鹿児島市与次郎のおいどん市場において、屋久島のパッションフルーツ販売促進活動を行った。JA種子屋久をはじめ、屋久島町、経済連、くみあい食品、屋久島事務所など、関係者8名で対応した。当日は、贈答用箱や個装パックの他、かき氷も販売した。購入者からは「パッションフルーツの香りと爽やかな酸味が好き」「夏にピッタリの果物で、家族にも食べさせたい」など好評であった。1日のみの開催だったが、延べ300名以上が訪れ、個装パックやかき氷がよく売れた。

販路拡大セミナーでスキルアップ

7月26日屋久島環境文化村センターにおいて販路拡大セミナーが開催された。参加者は全部で9名、内農業者は2名であった。前半は商談の基本について講義が行われ、後半は講師（伊勢丹バイヤー歴10年）を相手に、模擬商談を行った。果樹農家は実際の商品を持ち出し、具体的な商談を実施、講師からは、値段設定の駆け引きや在庫管理まで、実践さながらの商談と解説が行われた。参加者からは、バイヤーとの駆け引き等が体験でき、勉強になったとの声が聞かれた。

8 月



屋久島町令和5年度畜産共進会の開催

8月4日、町営旭牧場において第6回屋久島町畜産共進会が開催された。島内から発育良好な12頭の牛が出品される中で、審査の結果、第二区で岩川拓雄さんの「みなみふく1」号がグランドチャンピオンに選ばれた。また9月6日に種子島中央家畜市場で開催される熊毛郡畜産共進会に出品される4頭も併せて決定された。共進会は、将来母牛となる育成牛の審査であり、今後も審査結果を参考に産肉能力や商品性の高い血統構成を中心に自家保留・育成を行うよう指導していく。

イオン鹿児島店で屋久島茶の販売

8月19日、屋久島町茶業振興会がイオン鹿児島店において、茶業振興会会員6社から集めた煎茶、紅茶、かま炒り茶などを販売した。販売は、生産者1名と屋久島事務所の普及職員1名で対応した。購入者からは「屋久島がお茶の産地であることを初めて知った」「水出し茶がこんなに美味しいことに驚いた」など好評であった。約300名ほどに屋久島茶を試飲してもらうことができ、屋久島茶の普及に繋がった。今後も、屋久島茶の販売拡大に貢献していきたい。

9 月



第54回熊毛地区畜産共進会で屋久島牛が好成績

9月6日、種子島中央家畜市場において第54回熊毛地区畜産共進会が開催された。第1区18頭、第2区14頭の出品があり、屋久島から第1区に満園武男さんの「まおな号」が出品された。審査の結果、まおな号は発育の良好さや母牛としての資質が評価され、第1区の三席となり9月30日に開催される県畜産共進会への出品が決定した。今後も、まおな号の県共進会へ向けた育成指導を続けるとともに、審査結果を参考に屋久島における育成方法の波及を行っていく。

講座制研修が6年ぶりに地元開催！

9月6日～7日にかけて、屋久島事務所で講座制研修が開催された。屋久島での開催は6年ぶりで、果樹の新規就農者6名が出席した。1日目は、当課課長から農業情勢やリーダー論、指導農業士から先輩農業者講話、農業開発センター普及情報課主任専指からプロジェクト活動について講演があった。2日目は同センター経営担当専指から営農と生活設計、経営戦略書作成、ICT活用などを実践形式で学んだ。参加者は熱心に講師の話に耳を傾け、質疑応答にも積極的だった。

R5パッションフルーツは過去最高に迫る

9月12日、JA屋久島パッションフルーツ部会の出荷反省会がJA選果場で行われ、役員や関係者など12名が出席した。R5実績として、販売数量17.6t(前年比255%)、販売金額17,355千円(同266%)と昨年を大きく上回る実績となった。これは、部会発足当時の販売数量21tに迫る実績。要因としては、実止まりの良いルビースターへの品種転換や、開花時期の日照が十分であり、新規就農者2名の単収向上が図られたことも好影響となった。今後も安定生産に向けた支援を随時行っていく。

若手女性農業者交流会（Web会議）を開催

9月12日、若手女性農業者交流会が屋久島事務所において、Web形式で行われた。屋久島の女性農業者5名と鹿児島市の女性農業経営士2名が参加した。鹿児島市2名の事例発表の後、意見交換も実施。設定した90分はあっという間に経過した。会話にも熱が入り、お互いの想いを伝え合っていた。この取組は、島外の事例を、屋久島地区の若手女性農業者の農業経営の参考にして頂くことを目的に、初めて実施した。今後も女性農業者が、持続的に農業経営できるよう支援していく。

5人の新規就農者を励ましの会で激励！

8月30日、令和5年度新規就農者励ましの会を、屋久島町営農支援センターで開催した。今年度は、5人の新規就農者を迎えることができた。5人の新規就農者を迎えることは、平成25年度以降、10力年の中で一番多い年となった。会には、新規就農者をはじめ、指導農業士、女性農業経営士、農業青年クラブの各代表者、町、JA等、計23人が出席し、新規就農者らを激励した。新規就農者からは、「古い木を植え替えたり、品種を変えたりして頑張っていきたい」と抱負を語った。

10月



第72回鹿児島県畜産共進会に屋久島牛が出品

9月30日、始良中央家畜市場において第72回熊毛地区畜産共進会が開催された。第1区に屋久島町満園武男さんの「まおな号」が熊毛地区代表として出品され、屋久島町からとしては4年ぶりの出品となった。審査の結果優秀賞となったが、県内のレベルの高い出品牛の育成方法や血統の重要性など大いに刺激を受けることになった。今後も、県共進会で他産地との差をしっかりと認識し、発育がよく種牛性が高い屋久島牛を目指し育成指導を続けていく。

屋久島町茶業振興会で秋整枝検討会を実施

10月13日、秋の茶園管理研修会を屋久島事務所及び現地ほ場で開催し、茶生産者ら20人が参加した。茶園管理研修会は始めに、室内研修で秋整枝の基本技術と再萌芽対策について説明した後、現地研修を実施した。現地研修では、慣行園、更新園、有機栽培園での秋整枝についてそれぞれ検討した。これまでの摘採回数、時期などの管理状況や秋整枝の深さ等について生産者からの意見や質問が出され、活発な会となった。今後も、技術支援を継続し、茶生産者の経営に貢献していきたい。



奄美×屋久島たんかん産地間交流で切磋琢磨する

11月6～7日にかけて、奄美・屋久島のたんかん産地間交流を屋久島事務所で開催した。当日は両地域のたんかん生産者や関係機関等、計36名が出席した。1日目はJA種子屋久の集出荷体制を皮切りに、屋久島南部のトロイヤータんかん園、摘果モデル園、省力化園等の視察を行った。さらに室内検討は産地の共通課題に対して、議論が白熱した。2日目は屋久島北部の6次産業化に取り組む農家を視察した。双方にとって刺激になる交流が図られて、今後の産地活性化につながる事が期待される。

ぽんかん祭が99回を迎える

11月16日、町内平内地区において第99回黒葛原翁（つづらばらおう）ぽんかん祭が開催された。会には、平内区民や黒葛原翁の子孫、関係機関など約40名が出席した。故黒葛原兼成（かねなり）氏は、大正13年に台湾から導入し、現在の屋久島ぽんかんブランドを築いた「屋久島ぽんかんの父」と呼ばれた偉人である。現在、屋久島の果樹栽培は、たんかんが主力になる中、今後の振興方策を生産者や関係機関が一体となって検討し、ぽんかんの位置づけを確認する式典となった。

屋久島食の文化祭を開催

11月8日、生活研究グループと屋久島つわぶき会の共催による屋久島食の文化祭が屋久島町営農支援センターで開催された。13人の会員が各自一品以上、自慢の料理を持ち込み、レシピ等を説明した。会の中で日本茶インストラクターによる「屋久島茶のいれ方教室」も実施され屋久島茶を堪能した。審査後の昼食交流会はご馳走に囲まれ、皆笑顔で会話が弾んだ。食を通じての交流学習活動を目的として令和5年度の新規就農者を招待し、女性会員との交流も図られた。

家族経営協定が締結される

11月20日、野菜生産農家1戸が県、町、農業委員会の立ち会いのもと家族経営協定を屋久島事務所で締結した。関係機関を代表して農業委員から「締結により、今まで以上に効率化も図られ新たな展望が見えてきます。頑張ってください」と励ましの言葉が述べられた。締結農家からは、「家族経営協定で、家族間の役割が明確化された。経営発展に向け夫婦で頑張る」など今後の抱負が述べられた。

指導農業士が新規就農者に対し就農トレーナー研修を実施

11月9日に新規就農者2名に対し、指導農業士が就農トレーナー研修を新規就農者のほ場で実施した。研修内容は、秋の茶園管理である、秋整枝の基本技術について指導した。新規就農者らは、秋整枝を行う時期や整枝する高さを茶園ごとに確認していた。指導農業士から「よく管理されているのでその調子で頑張ってください」と励ましの言葉もあり、新規就農者はやる気に満ちていた。今後も、新規就農者に対し技術支援を継続し、就農定着に貢献していきたい。

12月



畑かん水利用講習会実施

12月8日に永久保地区において、茶生産者3戸に対し、畑かん水の利用講習会を実施した。講習会では、畑かん水を利用した病害虫防除、散水ルールの策定、水利用組合の設立、畑かん水設備の管理などを説明した。また、屋久島事務所農村整備係、屋久島町建設課、スプリンクラー散水業者からは、畑かん水設備について説明した。生産者らは来年度より畑かんを利用した病害虫防除を予定している。今後も、畑かん水の有効利用のために、支援していきたい。

ばれいしょ向け農薬ドローン散布

12月6日に原・麦生・安房地区にて、ばれいしょの省力化技術及び疫病対策としてドローン散布による農薬散布のを実施した。ドローン散布作業は鹿児島県経済連に委託しており、今回の散布実施面積は3.1ha（生産者は3戸）であった。生産者にもドローン散布の様子を見学してもらい、「こんなに作業が簡単で早く終わるなら、継続してやっていきたい」と話をされていた。今後も散布実施面積を拡大し、地域全体として取り組んでいけるように推進して行きたい。

地域計画策定に向けた集落検討会を開催

12月21日に永久保地区において、農業者8名と関係機関12名で地域計画策定検討会を開催。町が作成した経営規模の意向地図について経営規模縮小意向である空白地区を誰が担っていくか検討した。若手30代の2名に要望が来たが、1筆ごとの区画が小さく合意には至らなかった。地域農業の将来については、所得が見込める新たな作物の必要性が検討された。厳しい現実が述べられる一方、地域を維持しようと言う前向きな意見も聞かれた。残された課題は第2回会議で検討する。

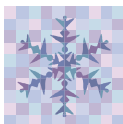
1月



ばれいしょ向けドローン防除実演会開催

1月15日に生産者向けのドローン防除実演会を原地区で開催した。参加者は、畑作生産者を中心に10人が参加した。実演会では、バレイショほ場において、実際にドローンを使った防除の様子を見てもらった。また、水分に反応して変色する「感水紙」を用い、散布量を色の変化で分かるように工夫した。実演会後のアンケートでは、「ドローン防除を実施したい」という生産者が9人、という結果を得られた。今後も、ドローン防除の実用性について、検討を続けていきたい。

2月



たんかん鉢入れ式が4年ぶりに開催！

2月2日、麦生地区において令和5年産たんかん鉢入れ式が開催された。たんかん農家や関係機関等、総勢40名が出席した。コロナ禍で4年ぶりの開催だったが、就農3年目の果樹青年のほ場で行われたこともあり、多くの関係者が関心を寄せていた。今年産のたんかんは果実外観、品質ともに良好で、鉢入れ式を皮切りに県内外へ出荷される。農林普及課としては、たんかんの隔年結果是正に取り組んだ1年の総まとめとして、本式典に臨み、今後も産地維持発展に向けて取り組む。

果樹青年が青年農業士に認定！！

2月2日、鹿児島市内のホテルにおいて令和5年度青年農業士認定交付式が開催された。青年農業士は、農業青年自らが課題を設定し、プロジェクト活動に取り組み、地域の模範となる農業者になることが期待される。屋久島からは果樹青年1名が認定され、「果樹園における雑草の生育相の変化」に半年以上取り組み、その活動が評価された。認定を受けた果樹青年からは、「就農して3年で認定を受けられたことが嬉しい。今後も新たにチャレンジしたい。」と意気込みを語っていた。

屋久島たんかんの出前授業で魅力発信！

2月13日、鹿児島市内の小学校において、屋久島たんかんの出前授業を開催した。6年生の児童約100名に対し、屋久島町の果樹担当職員が分かりやすく丁寧に、屋久島の概要やたんかんの特徴、農家の仕事内容を説明した。授業の最後には、たんかんをプレゼントし、もらった児童は満面の笑みを浮かべていた。また、当日行ったアンケート結果から、「お店で売っていたら買いたい」「農家さんの大変さが分かった」など多くの感想が寄せられ、たんかんの理解促進が図られた。

屋久島たんかんの品評会はレベルが高い

2月16日および20日、尾之間地区と原地区それぞれでたんかんの品評会が行われた。審査員は屋久島町の果樹担当職員と屋久島事務所の果樹担当2名で行い、厳正な審査を行った。審査項目は着色、玉揃い、病虫害、糖度の4項目で総合的に判断する。本年産のたんかんは台風の影響も少なく外観も良好で、秋期の乾燥により高糖度の果実に仕上がっており、審査も甲乙つけがたい状況だった。本品評会が農家間の栽培技術向上の契機になり、また意欲向上につながることを期待している。

令和5年度各種表彰について

表彰者の紹介

(1) 青年農業士認定

2月2日、廣盛亮治氏が青年農業士に認定されました。令和3年に就農し、「果樹園における雑草の生育相の変化」を課題に取り組みました。認定に際して、「就農3年で認定を受けられて嬉しい。今後も色々チャレンジしたいです。」と意気込みを話して頂きました。



(2) 家族経営協定を締結

11月20日、野菜生産農家の溝口栄作・悠里夫妻が県、町、農業委員会の立ち会いのもと家族経営協定を屋久島事務所で締結しました。溝口夫妻からは、「家族経営協定で、家族間の役割が明確化された。経営発展に向け頑張る」など今後の抱負が述べられました。



(3) 国産紅茶グランプリ銀賞受賞

まる釜製茶の藤山幸樹、美樹夫妻が10月29日に国産紅茶グランプリで銀賞を受賞しました。藤山夫妻は、「品種本来の個性を引き出す製法で、美味しさはもちろん、形状の美しさにもこだわっています。今後も良いお茶づくりに精進します。」と抱負を述べられました。



令和5年度活動体制



職 名	氏 名	担 当 業 務
農林普及課長	樋口 真一	課の総括
技術主幹(兼)農業普及係長	吉田 真一	係の総括, 経営, 地域営農, 食育・地産地消
技術専門員	新川 裕樹	畜産, 担い手育成, 農業機械
技術主査	片山 隆之	茶, 環境保全型農業, 新規就農者育成, 農業情報
農業技師	佐藤 賀俊	作物, 野菜, 花, 病虫害, スマート農業
農業技師	下村 正之	果樹, 青年育成, 気象